総合心療センター　作業療法室

室長　山内　学

当部門について

今年の作業療法室は、昨年に引き続きコロナ禍における運営でした。時間や空間や種目などに制限がかかっています。現状が、コミュニケーションをとるための大きな弊害になっていることを実感しています。自由度や表現することを制限するプログラム運営が継続しています。自由に、大きく動くことや表することが出来ていないプログラムになっています。そのことで、コミュニケーションのズレを感じることが多くなってきています。ストレスを抱えたままで、十分に対応できていないことに気づくと個別対応も多くなっています。そのために時間調整が必要でありますが、カバーしきれていない現状があります。作業療法活動の持ち方や投影されていることについてのスタッフでの検討する機会が増えてきました。「今ここで」そして先読みする場面が多い現状です。最近では、急性期の中での安心安全の提供と楽しむ体験が少なくならないように気を付けています。

作業療法の実践においては、入院環境でのコロナ対応することでの不参加もみられることもあります。しかし、早期に作業療法に導入できるような内容も工夫しています。入院環境でのストレスの発散にも対応できるプログラムの対応もしています。そのため、プログラム数は増えています。しかし、動的なプログラムや密になるような環境を希望するプログラムはまだ行えないことでのジレンマはあります。しばらくは、集団プログラムの中でも個別化した内容のものが継続されます。集団力動を用いたプログラムや心理教育的なプログラムや疾患別治療プログラムの運営するために自己研鑽やアセスメントは実施しています。

間接業務も、多く役割が増えています。管理や環境調整や準備などに時間を取られます。実際の運営時間を削ることなく実施することは優先しています。スケジュール化やフォローなどはしっかりできるようなってきています。以前の臨床活動が戻ることも考えています。

今後も、精神科における急性期治療と外来での回復度を上げることについても他部門との連携を強化していきます。外来作業療法からデイケ導入も念頭に動機づけ面接の幅を持った導入面接を行っていきます。臨床の効果を出すためのスーパービジョンや教育体制も求めていきます。